

「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」

平成 24 年度プロジェクト型共同研究報告書：東欧文学における「東」のイメージの形成と変遷：
特に「移動の文学」に注目して

メンバー

小椋彩（東京大学研究員）代表

阿部賢一（立教大学准教授）

加藤有子（東京大学助教）

スラブ研究センターの「平成 24 年度スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」に採択された研究課題「東欧文学における「東」のイメージの形成と変遷：とくに「移動の文学」に注目して」に基づき、3月初旬、立教大学（東京）および同志社大学（京都）でオルガ・トカルチュク氏の講演会が開催された。トカルチュク氏は現代ポーランドを代表する作家として国内外で圧倒的な人気と影響力を誇るが、今回が初来日となる。作家の招聘は通常の科研費では実現が難しいため、本研究課題が採択され、来日にかかる諸経費を賄えたことには大きな意味がある。

そもそも本研究は、科研費研究・基盤（B）「東欧文学における東のイメージに関する研究」（代表者：阿部賢一）のメンバーとの共同企画である。上記科研費研究は、「西」（西欧）と「東」（旧ソ連圏）に挟まれた「東欧」と呼ばれる地域における「東」のイメージについて、おもに文学テキストをもちいて検討しようというものだ。国境や政治体制の変化がこの地域にもたらしてきた特殊性について、「移動の文学」という新しいジャンルをも視野に入れて検討を進めている。「移動の文学」は、空間を意識したテキストとして近年「亡命文学」に代わって注目を集めるが、これには移民の文学などのほか、東欧の作家による個人旅行を記した紀行文学も含まれる。それはかつての社会主義体制下ではおよそ考えられなかった自由の象徴だ。

スラ研に具体的な企画（海外からゲストスピーカーを招聘し講演会を実施する）を提出するにあたり、ふさわしい人物としてまず思い浮かんだのがトカルチュク氏だった。氏の出身地はドイツとの間で国境線が引き直されてきた複雑な歴史を持つポーランド西部シロンスクであり、その特異な空間認識は作風にも強く現れている。東欧文学における空間イメージの探求という研究課題にうってつけだ。とくに 2007 年に出版された小説『逃亡派』（2008 年、ポーランドで最も権威ある文学賞である「ニケ賞」を受賞）は、「旅についての哲学的な思索の書」と評されており、「移動の文学」の最良のサンプルを示してくれそうだった。

2012 年 1 月、スラ研より研究課題採択の知らせを受けると、さっそく日本での講演を依頼する旨、本人に宛ててメールを書いた。返事がきたのは一ヶ月後。相手は人気作家で、一年先であろうと予定はどんどん埋まっていく。私たちもそれを承知のうえで、いったい

いつならば、講演を準備したうえで、遠い日本まで来てもらえそうか都合を尋ねた。以前、別件で招待のメールを送ったことがあったが、そのときは先約があり、来日は実現しなかった。今回メールの返事がすぐに来なかったのは、半年以上先の日程を作家が真剣かつ慎重に検討してくれていたためだった。

こうして講演会に向けた準備が始まったが、研究の趣旨に沿った講演を依頼するにあたって、こちらから提示したテーマがいくつかある。東、東欧、境界。あなたにとっての「東」とはいったいどこ（なに）を指しますか。ソ連ですか、あるいは、共産時代の記憶でしょうか。『逃亡派』についてお話しして下さってもけっこうです。なにしろあの小説のタイトルは、ロシア正教のセクトにちなみますし、じっさい、モスクワを舞台にした挿話もありますから。あるいは仏教や東洋哲学に詳しいあなたにとって、日本こそが遠くて近い東といえないでしょうか。

2013年2月、講演原稿が送られてきた。タイトルは「文学に現れた“中欧”という名のファントム：中欧文学は存在するか」。「東欧」文学における東のイメージ研究の一環、という趣旨説明にもかかわらず、「中欧」地域の定義から入るこの講演に、「東欧」の語はなかった。

そこで思い出されたのは、2009年にクラクフで開催された第2回ポーランド文学世界翻訳者会議だ。筆者はここで初めてトカルチュク氏本人に会った。そしてこの会議中、作家ミーティングの席上で彼女がたびたび強調していたのは、「中欧の作家」としての出自だった。中欧という土地やその歴史が彼女の文学に与えてきた影響は計り知れない。今回の講演原稿も、まさに出自に基づく自己定義から始まっていた。自らの文学体験からふりかえって「中欧」の地域的特殊性を見直すこの試みは、原文で16ページにも及んでいた。一方、あなたにとっての「東」とはなにかと尋ねたときに、私自身が予期していた回答は、文学に対する東欧革命の影響や、ポーランドの東に位置する大国ロシアについての具体的なイメージだった。しかしそれらはいずれもささやかな言及にすぎず、作家はティモシー・ガートン・アッシュを引いたうえで、「私たちはソ連が存在する前からここにいた」と書いてきた。ポーランド人もロシア人もまとめて「スラヴ」と勝手に括りたくなる自分の浅薄さを見透かされたように思い、またそうされることへのポーランド人の牽制ととれなくもなかった。作家にとってポーランドとは「東欧」ではなくあくまで「中欧」、「西の周縁」なのだった。

3月1日、立教大学で行われた講演会には延べ80人以上が来場、主催者の予想を超えた盛況となった。コメンテータに沼野充義先生を迎え、阿部賢一氏の司会のもと、久山宏一氏、三井レナータ氏のすばらしい同時通訳のおかげで講演は滞りなく進行した。2日後、同志社大学の諫早勇一先生のご協力のもと行われた京都講演会も、規模はやや小さかったものの、熱心な読者を含めて20名ほどの来場があった。親密な雰囲気の中、講演後の質疑応答も充実したと思う。ちなみに、両講演会后、これを活字で読みたいという声が多数寄せられたのだが、今夏刊行予定の『早稲田文学』誌上に部分訳が、6月中旬より12月まで

の期間限定で同誌のウェブサイトにも全文訳が（いずれも久山宏一訳）、掲載される予定である。

なお東京ではこの機を活かし、3月2日東京大学にて、トカルチュク氏のほか、作家のミハル・アイヴァス氏（チェコ）、詩人の山崎佳代子氏（在セルビア）の3人が登壇する朗読会が開催された。同時期に滞日する作家たちが一堂に会しそれぞれの国の言語で自作を朗読するという贅沢な企画で、スクリーンに投影する邦訳づくりやその他の準備に前日まで奔走することになったものの、これも終わってみれば多数の来場者に、主催者の一人として心底うれしく思った。

さて、トカルチュク氏の初来日はご主人同伴だった。東京近郊と京都の見どころを案内したくて方々お連れしたが、とりわけ鎌倉と京都には感銘を受けたようだった。トカルチュク氏が東洋哲学に造詣が深いことは作品やインタビューを通して知っていたが、銀閣寺や三十三間堂を拝観したとき（と、その売店でおみやげの曼荼羅を選んでいたとき）の熱心さが印象に残っている。観光を終えて食事を囲む場では、眼鏡の文学少女だった高校生時代、タルコフスキイの映画についてエッセイを書いてコンテストで入賞、賞品が初めてのモスクワ旅行だったこと、オルガという名前はロシア文学を愛する母がつけたもので、妹の名はタチヤーナということなど、トカルチュク氏の意外な「東」つながりが開陳されたりもした。そういえば、朗読会後に行われた懇親会の席で、少々酔いのまわった作家が美声を披露してくれた。歌っていたのはウクライナ語の民謡だった。祖母の代で移住してきたため、ウクライナには特別な愛着を抱いているとのこと。作家が言うには、文学は植物のように風土の影響を受ける。いくら世界がグローバル化されようとも。そういう意味で、中欧文学はキノコに似ている。第一次世界大戦で終焉した、一度死んだもののうえに生えひろがってきたから。そう言われるとたしかに、メタファーを多用する詩的な彼女の小説、断片的なその文体は、不連続なこの地域の歴史を、体現しているように見えるのだ。

最後に、本研究課題を審査、採択して下さったスラブ研究センターに心よりお礼申し上げます。また、実施にあたり、企画協力者として名を連ねてくれたセンターの野町素己氏、越野剛氏からは、一年以上にわたり多大な尽力をいただいた。とくに作家滞日中の1週間、成田から関空までの全日程におつきあいいただいた。心よりお礼申し上げます。